

村上春樹「七番目の男」における江戸川乱歩 「赤い部屋」との間テキスト性

道 合 裕 基

はじめに

村上春樹（1949-）の短篇「七番目の男」（1996年『文芸春秋』2月号に発表）は、百物語風の設定をし、タイトルにもある七番目の男が、自身の少年時代の出来事を語るというものである。男の口からは、少年時代にKという少年を、台風の通過時に発生した津波によって死なせたことが、自身のトラウマになっていると語られる。しかし、そのトラウマが、年月の経過とともに和らぎ、それまでとは異なった捉え方が可能になった、と男の話は結ばれる¹⁾。

これまでのところ、「七番目の男」に関する先行研究では、男のトラウマをめぐる議論が多くなされてきた。また、高等学校の国語科の教科書に掲載されたこともあり、教材研究も盛んに発表されている²⁾。本論では、「七番目の男」との類似点をもつ江戸川乱歩（1894-1965）の短篇「赤い部屋」（1926）との比較を行う。本論とも関わる「七番目の男」についての比較文学的なアプローチを試みる先行研究としては、Kという仮名に注目し、夏目漱石（1867-1916）の『こころ』（1914）や、梶井基次郎（1901-1932）の「Kの昇天」（1926）との関連が論じられている³⁾。しかし、「七番目の男」については、漱石、梶井以外の他の作家・作品からの影響については論じられてはいない。

また、残念ながら、村上は「七番目の男」の具体的な材源について言及していない。ただ、怪談を書くつもりだったが、本来の予定と異なる作品に仕上がった、と述べている程度である⁴⁾。そのため、「赤い部屋」にも乱歩の名にも触れられていない。しかし、「赤い部屋」と「七番目の男」には、共通点が見出せるのである。そこで、本論では、両作を比較し、その結果として、これまで注目されていない江戸川乱歩からの受容の可能性を指摘するものである。

1. 「七番目の男」と「赤い部屋」の類似点

1.1. 「赤い部屋」について

乱歩の「赤い部屋」は、「プロバビリティの犯罪」を描いたものである⁵⁾。「プロバビリティの犯罪」は、自分の手を汚さず、死亡する確率を高めて、人を殺すというものである。この物語では、Tという男が、聴衆である「赤い部屋の会」のメンバーを前に、自身の完全犯罪を語るのである。

「赤い部屋の会」のメンバーは、世の中に退屈しきっており、それで、奇怪な話の披露や、悪

趣味なイベントを企画している。Tが、その会のメンバーに迎え入れられるにあたり、会にふさわしい話を披露しているのである。Tは、これまで自身の手を汚すことなく、99人の命を奪い、罰せられていない、という話をする。Tの語りの巧みさと、語られる内容の不気味さに、室内は静まり返る。

そこへ、馴染みの給仕女が入室してくる。するとTはピストルを取り出し、給仕女に向けて発砲する。しかし、音だけがして何ともなかった。Tは冗談だと言って、今度は自分に向けて撃つように給仕女に仕向ける。Tに向けて発砲すると、実弾が入っていたとみえて、Tは胸から血を出して倒れる。皆は、茫然とし、100人目に自分を選んだのだという声上がる。すると、倒れていたTが笑い出す。実は、給仕女は自身の仕掛け人で、今までの迫真の語りも全てTの作り話であったというオチが付く、というものである。

乱歩が、「赤い部屋」を書く直接のきっかけとなったのは、谷崎潤一郎（1886-1965）の短篇「途上」（1920）を読み、感動したことである。「途上」は、谷崎の探偵小説への関心が端的に表れた作で、近代日本の探偵小説の一例として有名である。この作品では、犯人の湯河が、妻の死亡リスクを高めることで、チフスに感染させ、死に至らしめている。要は、「赤い部屋」と同じく、「プロバビリティの犯罪」を描いた作品なのである⁶⁾。

「途上」のトリックは、現在の推理小説の水準から見れば、無理のあるトリックであり、証拠も不十分なまま、犯人・湯河が罪を認める。しかし、乱歩はこの作を気に入り、自己流の「途上」を「赤い部屋」という形で世に問うたのである。

乱歩は、材源である「途上」に言及しているものの、管見の限り、村上には、乱歩や「赤い部屋」についての言及はない。これまで、乱歩との関連では、小林正明氏によって、村上の短篇「土の中の彼女の小さな犬」（1982）における犬の役割と、乱歩の『十字路』（1955）での犬の役割の類似性が指摘されている程度である⁷⁾。小林氏の指摘にしても、村上が、『十字路』について触れている発言を挙げている訳ではない。犬と隠された物というモチーフの共通性を注という形で触れたにすぎない。

しかし、村上の言及がなされていなくとも、「七番目の男」には、「赤い部屋」からの影響の可能性を見て取ることが出来る。そこで、以下に、「七番目の男」との類似点を見ていくことにしたい。

1.2. 語りの場の設定

「七番目の男」では、百物語を彷彿とさせる語りの場が設定されている。その語りの場で、聴衆を前に男の過去のトラウマが語られるのである。次に引用するのは、「七番目の男」の冒頭である。

「その波が私を捉えようとしたのは、私が十歳の年の、九月の午後のことでした」と七番目の男は静かな声で切り出した。彼がその夜に話をするようになっていた最後の人物だった。

時計の針はもう夜の十時をまわっていた。部屋の中に丸く輪になって座った人々は、西に向けて吹き抜けていく風の音を、外の深い闇の中に聞き取ることができた。

(「七番目の男」 p. 149)

ここでは、タイトルにあるように、男の順番が「七番目」であり、この室内に七人いることが分かるのである。百物語風の形式は、「七番目の男」に先行する「鏡」(1983)でも採用されている。それぞれ、語りの場にふさわしい不思議な物語が、語り手の口から紡ぎ出されるのである。

一方、「赤い部屋」でも語りの場が設けられ、Tの口から怪しい物語が語られる。次に引用するのは、「赤い部屋」の冒頭である。

異常な興奮を求めて集まった、七人のしかつめらしい男が……私もその中の一人だった……わざわざそのためにしつらえた「赤い部屋」の、緋色のビロードで張った深い肘掛椅子にもたれこんで、今晚の話し手が、何事か怪異な物語を話し出すのを、今か今かと待ち構えていた。(中略) やがて、今晚の話し手と定められた新入会員のT氏は、腰掛けたままで、じっとロウソクの火を見つめながら、次のように話しはじめた。(「赤い部屋」 p. 161)

それぞれの引用から窺われるのは、語りの場が設定され、その場に七人の人物が集っているということである。「赤い部屋」にはメンバーが七人いることで確定だが、「七番目の男」も男がその日語る最後の人物であることと、タイトルから室内に七人いることが分かるのである。つまり「赤い部屋」も「七番目の男」も会場に七人いるのである。七という数字が象徴的な数であるので、選ばれたとも解せるが、人数の一致は、「七番目の男」と「赤い部屋」の関連性を窺わせる。そして、語りの場での人数の一致だけではなく、語られる内容も、死にまつわる話という点で共通性をもつのである。

1.3. 死・殺人についての語り

語りの場の設定に関連し、その語られる内容も「七番目の男」、「赤い部屋」のつながりを示す。男とTの語る話の内容は、それぞれ友人Kの死、自身の殺人についてである。「七番目の男」では、Kの死は、男にとって忘れることの出来ない出来事であり、男のその後の人生に大きく作用した。次に引用するのは、男の語りの冒頭部分である。

「それは特殊な種類の、かつて見たこともないような巨大な波でした。」と男は続けた。

「その波は、ほんの僅かのところで、私を捉えることができませんでした。しかしかわりにそれは、私にとってもっとも大事なものを呑みこんで、別の世界に運び去ってしまいました。私がそれをもう一度発見し回復するまでに、長い年月がかかりました。取り返しのつかない、長い貴重な年月です」

(「七番目の男」 p. 149-150)

男にとってKの死は、重大な出来事であり、その呪縛に囚われ続けていた。男の語りは、すでに克服されているトラウマを再度語ることによって、現在の解消された状態を、より強固なものにしているとみなせよう。

男の語るKの死の経緯によると、津波の襲来を予期し、自分だけが助かったのである。この自分一人が助かったという罪悪感、恐怖に囚われてKを置き去りにし、自分一人だけが逃げたことなどが、男のその後の人生に重くのしかかっていたと言えるだろう。このように、男が物語るのは、Kという親友の死についての語りなのである。

一方、「赤い部屋」では、日常生活に退屈している聴衆を前にし、Tの奇怪な物語が開陳される。実際には、Tの作り話であるが、Tの語る多様な殺人方法は、迫真性を帯びて聴衆を戦慄させるのである。次に引用するのは、Tの語りの一部である。

私にとっては遊戯といってもよい一つの事柄を発見して、その楽しみに夢中になっていたからです。その遊戯というのは、突然申し上げますと、皆さんはびっくりなさるかもしれませんが……人殺しなんです。ほんとうの殺人なんです。しかも、私はその遊戯を発見してから今までに、百人に近い男や女や子供の命を、ただ退屈をまぎらす目的のためばかりに、奪ってきたのです。
(「赤い部屋」 p.163)

Tは、異常なほどの退屈を感じており、その一時的な退屈しのぎのために殺人を行ってきた、と語る。そして、その行動について「犯した罪を恐れてもいません」(p.163)と告白している。Tの態度は、七番目の男が、自身の行動を悔い、その後の人生に暗い影を投げかけていたのとは、対照的である。Tの話が、結末で、全て作り話であると明かされるので、罪悪感に襲われていないと解することも可能であるが、Tと男の態度とでは、正反対となっている。

また、語る物語の内容は、男の物語は、親友の死についてであり、Tの物語は、殺人についてである。事故死と殺人方法の告白という相違が見られるものの、2人の語る話は、日常では体験することのない出来事という点で共通性が見出せるのである。

1.4. 匿名と仮名

「七番目の男」は、タイトルにもなっている七番目の男の語る物語が中心になっている。しかし、「七番目の男」では、男の本名はついに明かされない。外見の描写や、現在の職業などは触れられているが、名前は明示されないのである。「七番目の男」における名前の不明示は、語られる物語内容の〈非日常性〉に加えて、話者の〈異界性〉を強調する。男の匿名に由来する〈異界性〉は、次のような男の外見描写とも関連をもつ。

七番目の男は五十代の半ばに見えた、痩せた男だった。瀬が高く、口ひげをはやして、右目のわきに、まるで細いナイフで突き刺したような小さな、しかし深い傷があった。

(「七番目の男」 p. 150)

男の外見上の特徴として、目の脇に傷があることが挙げられている。この傷は、男の物語から窺われるようなトラウマの象徴とも考えられるが、傷や痣は、聖痕などの〈神話素〉ともみなされ、男の〈異界性〉を強く全面に押し出すのである⁸⁾。これは、傷や痣が、通常とは異なる半神半人や、〈異界〉の存在であることの表徴として機能することによる。ゆえに、七番目の男にも、一種の〈異界性〉が見出せるのである。

また、男の匿名という設定からは、名前を当てること、つまり匿名にされていた名が明らかになることで、〈異界〉の存在の力を無効、退散させることが出来るという口承文芸的要素が想起される。例えば、名前当てのモチーフは、日本での「大工と鬼六」、イギリスの「トム・チット・トット」などの民話に登場する。

男は、名前を当てられて、特に退散させられる訳ではないが、ついに名を明かされることがないということから〈異界性〉を帯びたままなのである。

他方、「赤い部屋」では、語り手にTという仮名が用いられている。だが、なぜこの男の仮名が、Tなのかは説明されていない。また、語り手だけではなく、「赤い部屋」では、M 医院、R 病院などの仮名が登場する。「赤い部屋」での仮名も、本名が明かされることがないため、「七番目の男」同様に、語り手Tの〈異界性〉を強調していると言えるだろう⁹⁾。

結局、仮名と匿名という違いがあるが、男、Tは、二人とも実名には触れられないのである。二人の正確な名が示されないということは、ともに2人の語り手の〈異界性〉を強調していると言えるだろう。

1.5. 海を舞台にした殺人と事故

「赤い部屋」では、結末で嘘だと告げられるが、Tが自ら考案した殺人の方法が何種類も語られる。その方法は、退屈を紛らわせるために考案し、機会を窺うことで実行に移されたと語られる。そのようなTの話の中で、海を舞台にした水にまつわる殺人が一例語られている。それは、友人と海水浴に出かけ、巧みに友人を死に至らしめることに成功したという話である。

私はそれには十分熟練していたものですから、海底の岩にぶつかる前に、うまく向こうへ浮き上がってしまったのです。友だちは「飛び込み」にかけてはまだほんの素人だったので、まっさかさまに海底へ突き入って、いやというほど頭を岩へぶつけたに違いないのです。

(「赤い部屋」 p. 171)

Tは、自身が水泳が上手で、海中の地形を把握していたことを利用し、友人を海に飛び込ませて、死亡させることに成功したのである。友人の直接の死因は、頭部を損傷したことによるが、ここでは、海という条件を利用した殺人が語られる。

一方、「七番目の男」では、「プロバビリティの殺人」が語られる訳ではない。語られるのは、男の親友Kの不運な死である。台風の通過時に海に行き、運悪くKが波に呑み込まれた経緯が語られる。

「危ないぞ。波が来るぞ。」今度は私の口から大声が出ました。気がつくと、轟音もいつのまにか消えておりました。Kもようやく私の叫びに気づいて顔を上げました。でも手遅れでした。そのときには大きな波が、蛇のように高く鎌首をもたげて、海岸に襲いかかっていました。
(「七番目の男」 p. 160)

男の語りでは、Kが逃げ遅れて海で亡くなったことが示される。結局、Kの死体は上がらなかった。この点では、死体が上がり、蘇生措置も試みられたTの友人と状況は異なる。「七番目の男」、「赤い部屋」は、事故死、他殺という違いがあるが、ともに海での親友の死が語られているのである。

1.6. 結末における明転

「七番目の男」では、友人Kの死とそのショック、そして年月の経過により、トラウマが克服されるまでが語られる。そのきっかけが、Kの残した絵である。男は、Kの描いた風景画を見ることで、Kの美しい心象の反映を読み取るのである¹⁰⁾。それゆえに、Kが自分を恨んでおり、自分を死に導こうとしているという思いが、誤りであったと悟る。強い衝動に囚われたまま、仕事を休み、故郷の海を訪れることで、トラウマは完全に克服されるのである。

七番目の男はしばらくのあいだ、黙って一座の人々を見回していた。誰も一言も口をきかなかった。息づかいさえ聞こえなかった。姿勢を変えるものもいなかった。人々は七番目の男の話の続きを待っていた。風はすっかり止んだらしく、外には物音ひとつ聞こえなかった。
(「七番目の男」 p. 177)

男のトラウマ克服の物語が語り終えられると、外の風なども静まり、平穏な状態に転じている。ここでは、心の状態と天候、気象条件が相同関係にあるとみなせるだろう。

他方、「赤い部屋」では、Tが今まで行ったとされる凄惨な殺人と、Tの異常さに聴衆は静まり返っている。そして、続くTの死により、戦慄が極限に達する。しかし、Tの死が芝居であり、Tの物語も作り話であったことが明かされる。嘘であることが示された後、赤い部屋に満ちていた怪しい雰囲気も消失し、室内の空気は一転する。次に引用するのは、「赤い部屋」の結末である。

忽ちにして、部屋の中にただよっていた、あの夢幻的な空気を一掃してしまった。そこには、

暴露された手品の種が、醜いむくろを曝していた。(中略)「赤い部屋」の中には、どこの隅を探してみても、もはや、夢も幻も、影さえとどめていないのであった。

(「赤い部屋」 p. 176)

「赤い部屋」の結末では、物語られる前と後とで、それまでの赤い部屋に満ちていた暗鬱とした雰囲気が消え、現実に戻される。このように、「七番目の男」と「赤い部屋」では、物語が語り終えられることで、ともに当初の雰囲気が、明転しているのである。

以上、「七番目の男」と「赤い部屋」には類似点が多く見られた。では、「七番目の男」と「赤い部屋」の類似点からは、何が浮かび上がるのであろうか。次章では、2つの作品のあいだの連続性について検討したい。

2. 「赤い部屋」から反照した「七番目の男」

2.1. 「七番目の男」における「プロバビリティの犯罪」

これまで、「七番目の男」と「赤い部屋」との類似点を概観してきた。上述の類似点は、村上が、乱歩にも「赤い部屋」にも言及していないため、単なる偶然の一致による類似点の列挙になるかもしれない。しかし、「七番目の男」というテキストを読み解く上で、設定の類似した「赤い部屋」を参照することからは、新たな“読み”の可能性が見出せるのである。

仮に、類似点の指摘に基づき、「赤い部屋」が、「七番目の男」の材源であるとするならば、「七番目の男」にも「プロバビリティの犯罪」を描いた作品という性格が浮かび上がるのである。つまり、「赤い部屋」からの影響があるとするならば、男の語る過去の出来事は、不運な事故ではなく、自らの手を汚さずに成功させた殺人と位置付けることが可能となる。

男は、当時子どもだったので、綿密な計算があったとは考えにくい、条件がたまたま重なったために、Kを残して自分だけが逃げたとも解せるのである。逃げた理由については、引いていた波が、気が付くと自分達のすぐ近くにまで来ていたという恐怖ゆえに逃げた、という風に語られ、年齢、状況などを考慮すれば、決して非難されるべきものではない。しかし、本当に逃げた理由は、それだけであったのだろうか。これまでの「赤い部屋」との類似からすると、子ども時代の男の行動には、いくつかの疑わしい要素が指摘出来る。

まず第一に、男が、台風の小康状態に、海に出かけたことである。男の行動は、子どもの好奇心ゆえに、台風という〈非日常〉で気分が高揚し、海に出かけたとも読めるだろう。しかし、当初は、父親に近くを出歩いてくると告げながら、結局海に行くことにしている。小康状態であるとはいえ、なぜ台風時の海に行こうと思ったのか、は特に明かされない。

だが、海に行く途中でKに遭遇したのは偶然である。それゆえに、特に計画したことではないと思われる。しかしながら、台風時の海に行くことが危険だと分かりそうなものであるが、海を見に行くことを選択している。次の引用は、波が自分達の足元近くにまで打ち寄せていること

に気付いた場面である。

私は海のそばで育った人間ですから、子供なりに海の恐さを知っています。それがときとしてどれほど予測不可能な凶暴さを持ちうるかを承知していました。

(「七番目の男」 p. 158)

ここで、男が、海の近くで育ったので、海の見せる恐怖を知っていたと語られている。それにもかかわらず、台風時の海を見に行ったのである。単に男が子どもだったので、海の理解が実際には不十分だったともみなせるが、引っかかる点ではある。

第二に、死んだKが、男の親友でありながら、一学年下で、言語障害を持っており、体も弱かったと語られていることである。幼少時の男が、Kの保護者的な立場におり、Kを引っぱっていたことが窺われる。Kの心の優しさゆえに、Kと仲良くしていた、と男は聴衆に語るが、なぜ、そんな危険な時に、まして言語障害のあるKと一緒に海に行くことにしたのだろうか。保護者的な立場にある自分がいれば大丈夫であると高を括っていたのであろうか。普段から、Kとは海に行っていたことが語られてはいるが、男が、海の恐怖を知っており、Kに愛情を持っていたのならば、海に行くことは賢明な判断ではないと思われる。

先行する乱歩の「赤い部屋」では、偶然に殺害の条件が揃ったので、相手を事故死させることが出来た。Tには、殺人を行う際に、特に相手に対する怨恨などの理由はない。単に退屈を紛らわせるだけのために、殺人を行うのである。しかも、被害者の一人である友人とは親友と呼べる程の仲であったと語られている。実際、「七番目の男」での男は、Kと親友であった。まして、死因こそ違えど、ともに海での親友の死なのである。

しかし、「七番目の男」では、事故の目撃者がいる。その目撃者によって、気絶した男は、病院に運ばれるのである。目撃者の証言からKが、波に呑みこまれて行方不明になったということが、男の父親や、Kの家族など関係者に伝えられている。この証言があるため、男がKを溺れさせたという可能性は一応消去出来る。だが、この目撃者は、「少し離れた場所」(p. 165)から一部始終を目撃したとされている。そのため、この目撃者が、男が2度もKに波が来ることを叫んだのを聞いたのかは判然としない。男は、波の襲来をKに告げたときの様子を次のように語っている。

「もう行くぞ」と声をかけました、彼は私から十メートルくらい離れた場所で、私に背を向け、かがみこむようにして何かを見ていました。私はずいぶん大きな声を出したつもりだったのですが、Kは私の声に気づかないようでした。

(「七番目の男」 p. 159)

結局、もう一度叫んだときに、Kは気付くものの、間に合わなかった。子どもであった男にとって、目撃者の存在は、予期したことはないだろう。しかし、「赤い部屋」のTは、「プロ

バビリティの犯罪」の実行にあたり、目撃者を想定している。それは、電車が来る直前の踏切を渡ろうとしているお婆さんに「危いっ」と声をかけ、まごつかせることで轢死させたり、人が言ったのと反対のことをする強情な按摩に、反対の行動を採ると踏み、危ないから「左に寄れ」と告げ、右側にある工事用の穴に落として死なせるなどの悪行を重ねている。Tは、周囲に大勢の人がいることを逆手に取り、好意の言葉と受け取られる言葉をタイミングよく発することで、完全犯罪を成し遂げているのである。Tは、目撃者を想定した殺人について、次のように語っている。

誰が私の殺意を疑いましょう。なんの恨みもない見ず知らずの人間を、ただ殺人の興味のためばかりに、殺そうとしている男があろうなどと想像する人がありましょうか。それに「危いっ」という注意の言葉はどんなふう解釈してみたって、好意から出たものとしか考えられないのです。 (「赤い部屋」 p. 166)

このように、Tは、目撃されることを想定し、犯罪を行ったように語っている。男が、目撃者を想定したとは思われないが、「赤い部屋」を通して見ると、相手に対して注意を投げかける言葉が、相手を死に追いやる可能性を示している。

また、この事故で、Kだけではなく、Kの飼い犬も波に飲み込まれて死んでいる。先述の小林氏の論考では、「七番目の男」に言及されていないものの、犬が隠された物を露呈させる役割をもつと指摘されていた。「七番目の男」でのKの飼い犬の死は、隠蔽され、明らかになっていないものの存在を示しているのではなかろうか。それは、このKの事故死の真相であると言えるのではなかろうか。

第三に、Kの死後に、男が悪夢を見るなどのトラウマを得、転地までしていることである。これは、男の目の前で、親友が死んだこと、さらに助けることが出来そうだったのにもかかわらず、死なせてしまった事件のショックゆえに、転地を行っていたとも解すことが可能である。だが、その一方で、自身の犯罪の露見や、罪の意識により、悪夢にうなされ、当地に留まることが出来なくなったとも読めるのである。次の引用は、Kの事故死直後の周囲の反応についての男の語りである。

Kの両親は私を一度たりとも責めませんでした。私がそれまでKを本当の弟のようにかわいがって大事にしていたことを、彼らはよく知っていたからです。また私の両親も、私の前ではその事件に触れないようにしていました。でも私にはわかっていました。もしそうしようと思えば、私はKを助けることだってできたのです。 (「七番目の男」 p. 167)

この男の語りは、先述の「赤い部屋」でのTが、親友を海で殺害した後の状況を彷彿とさせる。次の引用は、Tが、親友が海中の岩に頭をぶつけて死亡したことで、事情聴取された際の描

写である。

私とその友だちとは親友の間柄で、それまでにいさかい一つしたこともないとわかっているのですし、(中略) 幸い私は水泳が上手だったために、あやういところをのがれたけれども、彼はそれが下手だったばかりに、この不祥事を惹き起こしたのだ、ということが明白になったのですから (後略) (「赤い部屋」 p.171)

しかし、特に疑われることもなく、Tはお悔やみの言葉を投げかけられている。このように、「赤い部屋」と対照して読むと、トラウマの克服というように解される「七番目の男」での男の語りには、「プロバビリティの犯罪」についての語りという性格が浮かび上がるのである¹¹⁾。

「赤い部屋」では、Tの話が全て嘘であったと明かされるが、「七番目の男」の男の話にも嘘が含まれていると思われる。それは、「赤い部屋」では、「プロバビリティの犯罪」が行われたということが嘘であったのに対し、「七番目の男」では、「プロバビリティの犯罪」を隠すための嘘であり、その嘘が、嘘のままで終わっているのである。

2.2. 村上による「解題」と「プロバビリティの犯罪」

これまで「七番目の男」には、「赤い部屋」からの連続性を踏まえるならば、男が「プロバビリティの犯罪」を行ったという可能性が見出せた。そこで、作者である村上が、乱歩や「赤い部屋」に言及していなくとも、「七番目の男」が、「プロバビリティの犯罪」を描いているのではないかという可能性を『村上春樹短篇集』に収められた村上の自作「解題」から見て行くことにしたい。

繰り返しになるが、村上は、「七番目の男」を当初は怖い話として書きたかったらしい。しかし、村上の当初の意図とは異なり、違う方向に物語の筆が進んでいったとされる。次に掲げるのは、「七番目の男」の自作「解題」である。

本当に怖いものはいったい何なのか？ 本当の怪異とはいったい何なのか？ 結局のところ僕がこの短編の中で描いたのは、人間の意識の中に存在する暗闇の深さなのだという気がする。それはどんな幽霊よりも、悪鬼よりも恐ろしいものだ。 (「解題」 p.265)

ここで、村上は、「人間の意識の中に存在する暗闇の深さ」を描いたと述べている。この「暗闇の深さ」は、続けて「自責という深い暗闇」(p.265) というように記されており、男がKを見捨てて逃げたことと、そのトラウマを指すというように解せる。

しかし、この「暗闇の深さ」は、条件が重なった際に、自らの手を汚さずに人を死に追いやる「プロバビリティの犯罪」の実行とも捉えることが可能である。それまで親友であったKを条件が重なったために、置き去りにして一人で逃げた男の意識内の「暗闇」とも解せるのである。男

は「恐怖」に襲われたために、呼びかけたものの、Kを置き去りにして逃げたと語っている。しかし、置き去りにした理由が「恐怖」だけではないとしたならば、「暗闇」という語の意味するところは変わってくるだろう。このように、村上が述べる「暗闇」は、「自責」ゆえに生じた「暗闇」とも、「自責」が生じる前に生み出された“悪意”などの「暗闇」とも読み解くことが出来るのである。

また村上は、「七番目の男」は、「怪談」的な「怖さ」は、どんどん違う方向にそれていって、べつのものにかたちを変えていった」(p. 265)とも述べている。「七番目の男」では、波に浮かぶKを幻視する場面があるが、いわゆる「怪談」的な恐怖を描いていない。ここでの「べつのもの」は、恐怖ではありながらも、人間の心の奥底に存在し、ふとしたことで浮上してくる「暗闇」のことを指しているのかもしれない。

つまり、村上の「解題」を敷衍するならば、「七番目の男」は、「人間の意識の中に存在する暗闇」である「プロバビリティの犯罪」の実行という恐怖を描いた作品として読めるのである。

おわりに

「七番目の男」には、江戸川乱歩、「赤い部屋」についての言及がないものの、ストーリー展開上の類似点が見られるだけでなく、「赤い部屋」を通して「七番目の男」を読み解くことで、「七番目の男」にも「プロバビリティの犯罪」を描いた作品という性格が指摘出来た。

つまり、男は、Kを自分の手を汚さずに殺害したとも読めるのである。それゆえに、良心の呵責に囚われ、事実の露見を恐れ、転地し、近年までトラウマとなっていたとも考えられるのである。男の物語は、トラウマ克服の過程というテーマに加え、犯罪の露見の可能性がなくなったという安堵も含まれていると解せるだろう。

本論では、乱歩の「赤い部屋」との比較を行い、「七番目の男」を読み解いたが、今後、村上の作品における日本近代文学からの影響について調査し、読み解くことを課題としたい。

註

- 1) 「七番目の男」の本文は、文芸春秋刊による『レキシントンの幽霊』所収に拠った。
- 2) 主人公のトラウマ克服の物語という指摘は、(近藤、2007)でなされており、教材研究としては、(角谷、2011 萩原、2015)などがある。語りの場としての百物語との関係については、(岡田、2016)を参照。
- 3) 漱石、梶井との比較については、(松本、2004)を参照。
- 4) 村上は、「七番目の男」執筆の理由を、よく覚えていないとしながらも、「僕は最初とにかく怖い話を書いてみたかったのだと思う。」(p. 265)と語っている(村上、2002)。
- 5) 「赤い部屋」の本文は、『江戸川乱歩全集』第1巻に拠った。
- 6) 「赤い部屋」の研究は、あまり進んでいないが、宮本和歌子氏による谷崎の「途上」の他に、宇野浩

- 二 (1891-1961) の童話集『赤い部屋』(1923) 所収の童話「生命の皮」、H・G・ウェルズ (1866-1946) の「赤い部屋」(The Red Room, 1896) からの影響が指摘されている (宮本、2015)。
- 7) (小林、1998) に詳しい。ここでは、『十字路』での殺人者が、井戸に死体を隠したが、犬がハイヒールを咥えてきたことで遺棄が露見することと、「土の中の彼女の小さな犬」での犬の象徴性に触れられている。
- 8) 村上の作品における〈神話素〉としては、痣や井戸が挙げられている (福嶋、2010)。また、男の傷をトラウマの象徴と読み解くものとして (高野、2008) がある。
- 9) 「七番目の男」では、死んだKの他に、男の住んでいた県が、「S県」とされており、転地先は、「長野県」と明記されている。男が、当初住んでいた県名が明かされていないことは、隠されたものの存在を示唆する。
- 10) Kの残した風景画に着目した論として (松井、2016) がある。
- 11) 柳澤裕哉氏は、森鷗外 (1862-1922) の「高瀬舟」(1916) での喜助の弟殺しを、巧妙な殺人として読み解いている (柳澤、2010)。従来は、「安楽死」の問題を描いたとされる同作に対し、死刑を回避するための殺人という読みを提示しており、「七番目の男」の男の語る内容の検討に対して示唆的である。なお、「高瀬舟」でも、聴衆の数は異なるものの、喜助が罪状を語るという形式を採っており、「七番目の男」の男の語りと類似する。

参考文献

- 江戸川乱歩「赤い部屋」『江戸川乱歩全集』第1巻、講談社、1978年。
- 岡田康介「〈喪主〉としての語り——村上春樹「七番目の男」から」『怪異の時空3 怪異とは誰か』茂木謙之介編、青弓社、2016年。
- 小林正明『村上春樹・塔と海の彼方に』森話社、1998年。
- 近藤裕子「七番目の男」『増補版 村上春樹作品研究事典』村上春樹研究会編、鼎書房、2007年。
- 角谷有一「「七番目の男」その暗闇の深さを読む」『「教室」の中の村上春樹』馬場重行・佐野正俊編、ひつじ書房、2011年。
- 高野光男「物語化に抗して——村上春樹「七番目の男」の語り」『国文学解釈と鑑賞』73(7)、至文堂、2008年。
- 萩原桂子「文学教材の研究：村上春樹「七番目の男」の言語表現」『九州女子大学紀要』92(1)、九州女子大学、2015年。
- 福嶋亮大「ネットワーク時代の文学——村上春樹前後」『神話が考える——ネットワーク社会の文化論』青土社、2010年。
- 松井香奈「村上春樹「七番目の男」論：〈風景画〉の拡大」『言文』(64)、福島大学、2016年。
- 松本常彦「「七番目の男」を迂回して「こころ」へ」『九大日文』(5)、九州大学、2004年。
- 宮本和歌子「江戸川乱歩「赤い部屋」の背景：谷崎潤一郎、宇野浩二、H・G・ウェルズ」『ユリイカ』47(11) 特集 江戸川乱歩：没後五十年』青土社、2015年。
- 村上春樹「七番目の男」『レキシントンの幽霊』文芸春秋、1996年。
- 「解題」『村上春樹短篇集Ⅱ 1990～2000』講談社、2002年。
- 柳澤浩哉「『高瀬舟』の真相——小説史上最も読者を欺いた犯人」『広島大学日本語教育研究』(20)、広島大学、2010年。